覚鑁の三摩地観の意義

亀山隆彦

平安時代初頭に即身成仏の概念が日本仏教界にもちこまれて以後、空海ないし最澄ら幾多の僧の解釈を経ることで、日本仏教に独自の成仏思想としての「即身成仏」は形成された。その、平安初頭に端を発する即身成仏の受容・解釈の歴史の中、覚鑁の同成仏思想は、はたしてどのように理解されるか。覚鑁は、主著とも評される『五輪九字明秘密釈』の中、「真言宗即身成仏」を証得する為の「秘之中秘」説として、五臓三摩地観を明らかにする。この五臓三摩地観について、つづけて簡単に説明しておくと、読んで字のごとく、腹中の五臓（ないしその相対のはたらき）にみずからの心を専注することで、即座に三摩地の境地に入り、さらに、それにより、「肉身五体」上に五仏五智を感得するという、中世期の日本密教に独特の瞑想法である。つまるところ、この五臓三摩地観が、右に述べる即身成仏の受容・解釈の歴史の中、いかなる意義を有するか、主として空海の主張との比較を通じて明らかにすることが、本発表の目的である。より具体的には、空海『即身成仏義』の「身」ないし「即身」の語義解釈、および、即身成仏のそれぞれ体・用といわれる六大・三密の解説を踏まえ、『五輪九字明秘密釈』の五臓三摩地観の内容を検討し、いまだ先行研究では指摘されたことのない、前者に対する、後者の特質を顕在化させることを意図している。

結論からいえば、『即身成仏義』で明らかにされる即身成仏思想に対する、五臓三摩地観の特質は、『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』に記録される、覚鑁の次の言葉に集約される。空海『即身成仏義』に関する講義の中、覚鑁は、即身成仏を指して「以二難レ入難レ覚肉身愚痴身一直二入大日曼荼円明宮一」と定義する。すなわち、時に御しがたく、仏道修行にとって妨げとなることもある衆生の「肉身」、および、肉身の生理的なはたらきを手段に即座に仏智を獲得することを、即身成仏と呼んでいる。まさしく、それこそが、即身成仏思想としての五臓三摩地観の特質である。

（龍谷大学大学院研究生）